



東京女子医科大学学術リポジトリ
<https://twinkle.repo.nii.ac.jp>

テュートリアル課題 治療進歩の光と影

著者名	東京女子医科大学
雑誌名	テュートリアル課題
巻	2014
号	S7
発行年	2014-04-14
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032352

2014年度 Segment. 7

課 題 No.2

課題名：治療進歩の光と影

課題作成者：膠原病リウマチ痛風センター 勝又康弘



無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意ください。

シート1

Rさんは、64歳の主婦です。生来健康で、これまで病院に罹ったことはほとんどありませんでした。しかし2か月ほど前から、朝起きたとき、手の指がこわばり、1時間ほどなかなか動かせなくなるようになりました。また、手や足の指（趾）の関節が痛むようになりました。

シート2

Rさんは、たまたま見たテレビの健康番組で紹介されていた病気が、自分の症状に非常によく似ていると思いました。翌朝、さっそくその番組に出てきた某大学病院の専門外来を電話で予約し、幸い2週間後に受診することができました。初診の専門医は、問診に続いて、関節の診察をしました（資料1）。

シート3

診察した専門医は、経過と症状（資料1）からRさんの症状は「慢性多関節炎」であることを説明し、その原因として疑われる病気をいくつか挙げました。それらの鑑別のため、Rさんはいくつかの検査を受けました。翌週、Rさんは診察した医師から病気の診断名とそれがどのような病気であるか、説明を受けました。合わせて、できるだけ早く治療を受けるよう勧められました。

シート4

これまで病気や病院とは縁の無かったRさんは、突然病気になってしまったこと、すぐに治療が始まることに、不安を感じました。しかし、テレビ番組で紹介されていた病気とまさに同じ病気であったこと、したがってある程度予備知識や心構えがあったこともあり、担当医の勧める治療を受けることにしました。まずは、内服薬による治療が始まりました。

シート5

内服薬（メトトレキサート）による治療が始まって3か月後、Rさんの関節症状はある程度改善し、家事もそれなりにこなせるようになりました。しかし、症状は完全になくなったわけではなく、ペットボトルの蓋を開けたり、包丁で野菜や果物を押し切る時などには、まだ手の痛みを感じます。また、担当医は、まだ幾つかの関節が腫れて炎症が残っていること、このような関節は将来変形してしまう可能性が高いことを説明しました。Rさんは、担当医の勧めに従い、注射薬による治療も受けることになりました。注射を受けることには少なからず不安もありましたが、例のテレビ番組でも、この病気の予後を変えた画期的な治療法として紹介されていたことを思い出し、また投与前のスクリーニング検査では何も問題がなかったので、思い切って治療を受けてみることにしました。

シート6

注射薬（アダリムマブ）による治療が始まって3か月後、Rさんの関節症状はほぼ完全に消失し、家事も病気になる前と同じようにできるようになりました。担当医は、診察所見、血液検査ともすべて病気の活動性は治まっており、X線でも関節の変形・破壊は生じておらず、寛解状態にあることを告げました。Rさんは、それを聞いてたいへん嬉しく思いました。

シート7

しかし、そのさらに1か月ほど後から、空咳が出るようになりました。2～3日後には38℃前後の発熱が続き、息苦しさも感じるようになりました。救急車にてかかりつけの大学病院の救急外来を受診したところ、血液ガス分析で、PCO₂ 28.7 Torr、PO₂ 29.2 Torr、SaO₂ 54%（室内気）と著しい呼吸不全が認められ、検査を受け、リウマチ内科／集中治療室に緊急入院となりました。入院担当医は、呼吸器症状の原因として、幾つかの主な可能性を挙げました。

シート8

入院担当医は、呼吸器症状の原因として、幾つかの主な可能性を挙げました。ただし、入院直後の時点ではそのいずれとも確定できず、一方で病状は重篤かつ急を要するため、同時に複数の治療を始めることを説明しました。Rさんとその家族は、このようなことが起きる可能性については予め説明されていましたが、本当に自分自身に起きてしまい、すっかり動転してしまいました。それでも、入院担当医の説明に納得し、お任せすることにしました。既に行われていた酸素投与・非侵襲的陽圧呼吸（NPPV）に加えて、大量ステロイドを含んだ多数の薬が追加されました。入院時の血液検査・気管支洗浄などの結果から（資料7）、最終的に「ニューモシスチス肺炎」と診断されました。発症後早期に的確な治療を受けられたこともあって、Rさんは1か月ほどで無事退院となりました（資料8）。関節炎に対する治療は今回の入院時にいったんすべて中止されましたが、ニューモシスチス肺炎に対するステロイドを漸減されながらもまだ多めの量で内服していることもあって、関節症状はまだ完全に治まったままです。しかし、Rさんとしては、今後の関節炎の治療や、今回のような肺炎の再発に対して、心配で気が安まりません。